

歴文 7 月研修会

「五條市の歴史を訪ねるⅡ」

～藤岡家住宅見学と古事記探訪～

資料

1、参加者名簿

2、7 月度歴文研修会資料

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ
(平成 27 年 7 月 14 日)

歴文7月研修会 出席者名簿

	氏名	当日集金額(円)	内既収額	参加費合計(円)
No.1	青木 幸子	1900	2500	4400
No.2	阿部 和生	1900	2500	4400
No.3	池田 敬二郎	1900	2500	4400
No.4	池田 富子	1900	2500	4400
No.5	池田 信明	1900	2500	4400
No.6	岩本 次郎	1900	2500	4400
No.7	内河 洋文	1900	2500	4400
No.8	川井秀夫	1900	2500	4400
No.9	川口 達夫	4400	0	4400
No.10	岸谷 和代	4400	0	4400
No.11	佐藤 涼宇子	4400	0	4400
No.12	下村 晴文	1900	2500	4400
No.13	杉本 登	4400	0	4400
No.14	寺田 孝	4400	0	4400

	氏名	当日集金額(円)	内既収額	参加費合計(円)
No.15	富井 忠雄	1900	2500	4400
No.16	中井 弘	1900	2500	4400
No.17	西谷 範子	1900	2500	4400
No.18	林 令子	4400	0	4400
No.19	坂東 久平	1900	2500	4400
No.20	広田 朋子	4400	0	4400
No.21	藤田 秀憲	1900	2500	4400
No.22	古川 祐司	1900	2500	4400
No.23	森 英雄	4400	0	4400
No.24	八木 順一	1900	2500	4400
No.25	弓場 厚次	1900	2500	4400
No.26	吉村さつき	1400	3000	4400
No.27	和田 啓志	1900	2500	4400
	合計	70,800	48,000	118,800

五條市の歴史を訪ねるⅡ 「五條市の藤岡家住宅見学と古事記探訪」

ご挨拶

昨年の5月の研修会「五條市の歴史を訪ねる」では、藤原氏南家の氏寺「栄山寺」、天誅組が本陣を構えた五条代官所、江戸時代からの古い民家が残る町並みの新町通り（重要伝統的建造物保存地区）、藤原一族の政争の犠牲となった聖武天皇の皇女・井上内親王、その子他戸皇太子の崇りを恐れて建立された御霊神社を訪ねて、五條市の奥深い歴史に触れました。

今回の研修会「五條市の歴史を訪ねるⅡ」では、金剛山の東南麓、古くは「宇智の大野」と言われた地に所在する古民家「藤岡家住宅」を見学します。

また、古事記に言う木花佐久夜毘売（このはなさくやひめ）と瓊瓊杵尊のロマンの杜や、神武東征ゆかりの地「うちのの館」館長川村先生の解説と案内で巡ります。

今回もまた、有意義な研修会となりますよう、皆様のご協力をお願いいたします。

担当世話人 中井 弘
西谷 範子

《本日のスケジュール》

- 8：30 中小企業会館前出発
- ⇒10：00 藤岡家住宅着
- ⇒10：00～11：00 川村館長のお話
- ⇒11：00～12：00 藤岡家住宅見学（2班に分かれて）
- ⇒12：00～13：00 大広間にて昼食・休憩

- ⇒13：00 古事記探訪 出発
- ⇒阿田神社他
- ⇒真土峠
- ⇒15：00 帰途
- ⇒16：30 近鉄奈良駅着（予定）

I. 藤岡家住宅（うちの館）

1. 登録有形文化財「藤岡家住宅」

天保 3 年（1832）に建てられた藤岡家住宅は、敷地約 400 坪、建物約 200 坪の江戸時代の代表的な庄屋屋敷であった。当時の面影が残る店の間や太い松の梁がわたる重厚な内蔵をはじめ 10 棟が貴重な建築資料といわれる。

3 代前の当主、俳人として有名な藤岡長和（俳号玉骨）の生家で、茨城県在住の現当主、藤岡宇太郎氏が改修工事を行い、棟梁・柴田正輝たちによって 3 年の歳月を費やして復元・修理され、平成 18 年に国の有形文化財として登録された。「NPO 法人うちの館」が管理・運営して平成 20 年 11 月に公開された。

文人たちが寄り集まりサロンのような雰囲気であった藤岡家の思想を受け継ぎ、「うちの館」では四季折々のイベントを開催するほか、句会、歌会、講演会、演奏会などに場所を提供している。

今日は「南方熊楠からの手紙展」が開催中、加えて珍しい着生植物「風蘭」（別名富貴蘭）が邸内の各座敷に展示されている。

2. 近内町の歴史

藤岡家住宅のある近内町は古代には「宇智の大野」といわれた一帯にある。

「万葉集」には欽明天皇が宇智の野に狩猟した時の歌に『たまきはる宇智の大野に馬並めて、朝踏ますらむその草深野』と詠まれている。また、「続日本記」には文武天皇が藤原京からしばしば行幸・遊猟されたとある。

江戸時代、金剛山に参詣する人は多く頂上付近の宿坊も賑わっていた。五条側からの金剛山登山道は小和道、天ヶ滝道、久留野道の 3 つのルートがあり、これらの道が近内で合流するため登山口としても賑わった。1806 年庄屋の藤岡長兵衛が屋敷前に立てた「左こんごう 右かうや」の道標が今も残っている。

4 つ目のルートに千早峠（別名五条峠。標高 800m）を越えて千早赤坂村へ下る道がある。五条と河内を結ぶ最短直線コースとして古くから利用されていた。

因みに、天誅組の変では、中山忠光率いる天誅組 38 人は京を進発して、河内の観心寺（楠木正成建立）に集結し、千早峠を越えて五条代官所を急襲した。

また、近内周辺には、5 世紀前後の古墳「近内古墳群」が点在している。

3. 藤岡長和（明治 24 年～昭和 41 年） 俳号：玉骨

- ・明治 21 年宇智郡近内村に藤岡家 6 代目として生まれた。生家は江戸時代から続く庄屋で、両替商、質商、薬種商、染物屋などを営んでいた。学業成績拔群で将来を嘱望されて育った長和は、奈良県立五条中学校時代に正岡子規主宰の「ホトトギス」、与謝野鉄幹・昌子夫妻らの「明星」などの影響を受け、三高に入学してから俳句、短歌の才能が開花する。
- ・東京帝大を卒業後、内務官僚として和歌山、神戸、金沢、長野、岐阜などの赴任先で、また佐賀・和歌山・熊本県の官選知事を務めながら俳人としても活躍、高浜虚子、正岡子規、与謝野夫妻、阿波野青畝（せいほ）などと広く交友があった。
- ・戦時中、大日本紡績常務取締役、南都銀行取締役などを務めたが空襲で大阪の家が焼失、やむなく帰郷した。
- ・ホトトギス同人に推され高浜虚子に師事する。関西草樹会などに入会、大和俳句会や毎日新聞の選者にも選ばれた。
昭和 33 年古希の祝いで「玉骨句集」が出版され、巻頭に高浜虚子の句「古希翁といへど大和の大桜」がある。まさに大和人士中の大桜であった。
(注：「玉骨」とは梅の古木に出来る瘤のこと。藤岡住宅の庭に樹齢 250 年の梅の木がある。長兵衛梅と名付けられている)

玉骨が自分の屋敷で詠んだと思われる以下の句がある。

- ・酔を圧す 大文銅は 家のもの (昭和 24 年の作) 台所
- ・蔵の前 涼しきことを 猫知れり (同 18 年) 内蔵
- ・しぐるるも 京めき茶事の 客まうけ (14 年) 貴賓の間
- ・假住と いへど傳家の 屏風なる (14 年) 大広間
- ・紅梅の 移ろひはてて それとしも (愛娘瑠璃子作) 茶房
- ・花曇り われも縄文土器 掘らな ? 米蔵
- ・天井に あそぶ光や 泉殿 (17 年) 登山休憩所
- ・溶岩の 壁負う学びや 島小春 (21 年) 子持ち石

4. 南方熊楠からの手紙展

《南方熊楠》（慶応3年～昭和16年）

- ・明治維新直前の慶応3年、和歌山市に生まれ大学予備門（東大の前身）を中退後26歳の時にロンドンに渡る。イギリスでは大英博物館東洋調査部で主として博物学、民俗学に関する書物を筆写しながら研鑽を積む。
（1897年大英博物館で孫文と出会い意気投合し、手紙での交際が続く）
- ・1900年（明治33年）に帰国し、40歳ごろ田辺町に居を構えてから、それまでに培った驚異的な知識を基礎にして民俗学、宗教学関係の論文を発表すると共に、植物学に関する独自の研究を行った。これら多方面にわたる研究業績は、英国科学専門誌「ネイチャー」などに多数掲載され「日本にミナカタあり」と世界に知れ渡る。
- ・1906年、46点の粘菌標本を大英博物館に寄贈した。これが英菌学会会長の目に留まり、日本産粘菌として英植物学雑誌「ボタニー」に発表され、以降世界的な粘菌学者としての地位を確立し、昭和4年の昭和天皇へのご進講につながっていくのである。

熊楠が専門に研究した植物学の対象は、主として淡水産藻類、菌類、そして粘菌の3つである。しかし最も光り輝いたのは粘菌研究だった。粘菌はその生活環のなかで形態を変化自在に変えるので「変形菌」と呼ばれた。バクテリアや菌類のキノコあるいはカビと誤解されることがあるがこれらとは全く異なる。むしろ動物的であり、アメーバが周囲のバクテリア、単細胞藻類、カビなどを食べて成長し、分裂し巨大化していく。

1917年熊楠は自宅の柿木の樹皮上にこれまで見た事が無い粘菌を発見し、英菌学会会長の息女によって「ミナカテルラ」という属名でイギリスの植物学雑誌に発表された。粘菌は通常落ち葉や腐った朽木の上で発生する。生きた木の上で発生するというのは、当時としては常識外の画期的な発見であった。

熊楠が日本の植物学専門誌「植物学雑誌」に寄稿した論文には、昭和天皇（当時摂政宮）に粘菌標本を献上したとある。熊楠の専門が粘菌と見なされるようになった最大の理由は、民間人として初めて昭和天皇への進講のテーマが粘菌であったことによると思われる。

昭和天皇・皇后両陛下は33年ぶりに和歌山を訪れ、白浜の宿舎より神島を遠望して詠まれた御製がある。

雨にけぶる神島を見て 紀伊の国の生みし南方熊楠を思う

《藤岡長和と南方熊楠の自画像》

南方熊楠の自画像



大正10年11月、南方熊楠は、高野山管長土宜法龍の招きで、高野山一乗院に滞在しており、ここから神戸内務省官舎の藤岡長和に出した葉書に珍しく自画像が描かれている。

当時、熊楠は「南方植物研究所」の設立に奔走しており、内務官僚の藤岡との接点があったのだろうか。

II、五條市の歴史を巡る

1、五條市の成立ち

五條市は、1957年（昭32）に、宇智郡五条町、牧野村、北宇智村、宇智村、大阿太村、南阿太村、野原村、阪合村が合併して発足した。その後、1959年（昭34）宇智郡南智村を編入し、さらに2005年（平17）吉野郡西吉野村、大塔村を編入した。現在は、旧宇智郡の殆んど五條市となっているが、その中の「阿田」は、古事記・日本書紀の中でも我が国の最も古い時代に登場する地名の一つである。

2、神倭伊波礼毘古命と阿田

古事記によると、神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれひこのみこと＝神武天皇）が日向より出て、瀬戸内海を東に進み、大和の国に最初に足を踏み入れた土地が「阿田」とされている。『熊野より八咫鳥に導かれて「吉野河の河尻」に至るが、河で筌（やな）で魚を捕っている人に出会う。名を問うと、自分は国つ神で、名は贅持（にへもつ）の子と答える。（これは阿陀之鵜養あだのうかいの祖である）』

なお、日本書紀では、神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）が熊野から、菟陀穿邑（うだのうがちのむら）に出て、そこから吉野を巡り、河に沿って行くと、梁（やな）で漁をしている人に会うと記されている。

どちらにしても、阿田に着いて、大和を平定し、橿原宮（かしはらのみや）で即位し、第1代の天皇、神武天皇になったと伝えられているのである。また、「梁」や「直持（にへもつ）」は地名になっており、五條は筌漁発祥の地として今に至っている。

3、^{このはなさくやひめ}木花佐久夜毘賣^{ひめかけ}と比売火懸の森・・・又はシメシカケの森

邇邇芸命（ににぎのみこと）が天照大神の命によって、高天原から日向の高千穂に降りた時、麗しき美人に会う。誰かと問うと、大山津見の女（むすめ）、神阿多都比売（かむあだつひめ）、亦の名を木花佐久夜毘賣（このはなさくやひめ）と答える。そこでこの姫と結婚する。

姫は妊娠し、出産になった時、邇邇芸命は「一宿（ひとよ）で妊娠するのはおかしい。これは自分の子ではなく、国ツ神の子ではないか」と疑う。そこで姫は「もしこの子が国ツ神の子ならば無事に生まれることはないだろう」と戸無き八尋殿（となきやひろどの＝出入り口のない大きな家）を作り、中に入って土で入り口を塗り塞いでしまう。そして出産の時、その殿に火をかける。

かくて、火の一番盛りに燃えている時に生まれた子を「火照命」（ほでののみこと）、次に生まれた子を「火須勢理命」（ほすせりののみこと）、最後に生まれた子を「火遠理命」（ほおりののみこと）と名付ける。

2番目に生まれた「火須勢理命」は、水の神として二見神社に祀られ、「雨師さん」と親しまれている。この森は吉野川流域にあり、禁足地となっている。

4、阿陀比売神社^{あたひめじんじや}

五條市内式内社11社のうちの由緒ある古社。五條市重要文化財指定第1号。創立は崇神天皇15年と伝わるが定かではない。

728年藤原武智麻呂が神殿を寄進。その後兵火にて罹災。1393年社殿を再建。

1461年改造され、本殿は一間社春日造りで、江戸初期の建築と考えられる。

西流してきた吉野川が東阿田付近で南流に大きく向きを変える所の右岸に鎮座する。

・祭神：阿陀比売大神（木花咲耶比売命）御子：火須勢理命（ほすせりのみこと）、火照命（ほあかりのみこと）、彦火火出見命（ひこほほでみ）の4柱

当地の氏神さまでもあるが、安産の神としても信仰厚く、鈴の緒をいただき腹帯とする。（男子が欲しい時は白、女子が欲しい時は赤）これは比売が御子を産む時、室に火をかけて無事生んだことから安産を祈る神になったと考えられる。

また、二見首（ふたみのおびと）、大角隼人の2氏族がこの地に住んでおり、祖先が両方とも火闌降命（ほのすせりのみこと）と伝わっており、祖先を祀ったのではないかと考えられる。周辺一帯は考古学上でも重要な地域で、阿陀一帯に縄文、弥生、古墳時代の遺跡が点在している。

Ⅲ、万葉の名所 真土峠

1、真土峠^{まつちとおげ}（待乳峠）

紀伊と大和の県境で、葛城山脈から南下して紀ノ川にそそぐ落合川が両県の境とされていた。この川の左岸が、嘗ての南海道の紀伊と大和の国境に当たる洪積丘陵地で「木ノ戸」とも呼ばれた。

奈良県側の天女山と和歌山県側の真土山の間、落合川の深い溪谷があり、この川を渡れる所がある。自然の石が二つ並んでいて、間が少し空いている。故に「飛び越え石」の名があるが、馬も飛び越えなければならず「馬の飛び越え石」の名も。

万葉の人々の旅路としても人気があったのは、昔は大和と紀州を見渡せる景観の良い古道であったからだろうと思われます。万葉集に8首の歌が詠まれており、すべてが歌碑として建てられています。

また、弘法大師も高野山と都との行き来に通ったらしく、弘法大師伝説も多く残っています。待乳峠の名は、弘法大師がここを通った時、腫瘍で乳が出ない女人のために、山の松の木の脂と菜種油で霊薬を調合した所からです。

2、真土山の万葉歌（犬養孝氏の歌碑も点在する）

あさもよし 紀伊人羨しも 真土山 行き来と見らむ 紀伊人羨しも（巻1-55）

真土山 夕越え行きて 廬前の 角太川原に ひとりかも寝む（巻3-298）

白栲に にほふ真土の 山川に 我が馬なづむ 家恋うらしも（巻7-1192）

あさもよし 紀伊へ行く君が 真土山 越ゆらむ今日ぞ 雨な降りそね（巻1680）

椽の 衣解き洗ひ 真土山 本つ人には なほしはずけり（巻12-3009）

いで吾が駒 早く行きこそ 真土山 待つらむ妹を 行きて早見む（巻12-3154）



飛び越え石



万葉歌碑

